

## 実践に役立つ研究の面白さ、楽しさ、難しさ

コーディネーター 東京女子医科大学看護学部 寺 町 優 子

臨床における看護研究の面白さと言えば、患者を取り巻く様々な場面で生じる難解な問題が、研究の成果として、スルスルと解決する喜びに浸れるときではないでしょうか？

私の経験を例にあげますと、心筋梗塞の患者が入院して来て、早期の絶対安静の時期に強度の腰痛を訴えた事がきっかけでした。10年ほど前は、入院直後の安静期間が長く、心臓破裂などの合併症を恐れて体位を患者が望む側臥位になかなか変換できませんでした。苦痛に耐える患者を見ることは、ベッドサイドで看護をするナースのストレスでもありました。そこで、腰痛を訴える患者の血圧や心拍数の変化を経時的に観察をしたところ、無理に仰臥位に保持すると、血圧や心拍数がかえって著明に上昇することを発見したのです。つまり、仰臥安静にするほど心負荷が増すということです。この現象から、研究的取組みを開始し、仰臥位と側臥位の循環動態の相異や、体位を変換する適正な時期の検討を始めました。その結果、入院早期から、安楽な体位を保持することが患者にとって最も適正であることが判明しました。しかし、共に働く医師の同意を得ることが臨床での安静度を決するのに欠かすことができません。これらのデータは、最終的に医師の同意を得るのに十分でしたので、安静度は、直ちに変更されました。この福音は、患者にすぐに現われました。腰痛を訴えたり、安静度の強要でストレスフルになる患者が激減しました。研究に取り組んだナース達の喜びは言うまでもありません。このように、データを根拠に現状を改善する面白さやそれによるワクワクする楽しさは研究の醍醐味と言えるでしょう。しかし、一方で研究には、それに要する時間やお金がかかる問題があり、多忙で厳しい臨床での看護業務の中で研究を始めることが、多くの忍耐を必要とし、それ程容易ではないことも事実です。本交流セッションは、臨床での研究に取り組もうとするナースの気持ちに沿えるように、そこで生じる疑問、質問などを気軽に出示して頂き、会場にお越しの参加者のみなさまとアドバイザーを含めて徹底的に話し合い、今後の参考にして頂こうというのが目的です。皆さまのアドバイザーとして、3人の先生をお招きしました。調査研究、実験研究、質的研究の幅広い分野から意見交換ができると思います。是非、参加して、日頃の問題を解決し、スッキリした気分でもた臨床の研究に取り組んでくだされば幸いです。

アドバイザー

- |       |  |
|-------|--|
| 眞嶋 朋子 | 東京女子医科大学看護学部 成人看護学助教授                          |
| 酒井 郁子 | 千葉大学大学院看護系研究科 看護システム管理学専攻<br>地域高齢者看護システム管理学助教授 |
| 千崎美登子 | 北里大学東病院4南（消化器内科）病棟看護係長<br>がん看護専門看護師            |